マイヒーロー
降谷さんの
頭の中は
私でいっぱい
らしい！

まえがき

・降谷零がお相手のネームレス夢小説本です。
・原作者様・公式各位とは無関係の二次創作です。

マイヒーローとは

・警察学校に通っている降谷さん×女子高校生のラブコメ。
・降谷さんと夢主は、5学年差です。
・何かと不幸体質である夢主。
・ある日、夢主は電車で痴漢に遭遇。降谷さんに助けてもらったことで、一目惚れする。
・その後も、ストーカーから助けてもらったり、クリスマスを一緒に過ごしたり、関係を深めているところ。
・今作は、警察学校編沿いのストーリーです。

……これまでのストーリーはこちらから →

(サイト：Dear Criminal)

もくじ

P2 まえがき

P4 Ⅰ．その夜、私はコンビニにいた。

P50 Ⅱ．あのコンビニ強盗から数日。

P73 Ⅲ．「ありがとうございました」

P110 Ⅳ．受験直前、とある土曜日。

P121 あとがき

I

その夜、私はコンビニにいた。

夕食だけでは物足りず、甘い物が食べたい！　と冷蔵庫の中を見た。けど、残念ながらデザート類は何もなかった為である。

すっかり甘い物の口になってしまい、簡単には諦められずコンビニに行こうかな……と考えた。

壁掛け時計で時間を確認すれば、まだ20時前。両親は仕事で遅くなるので、買って来て貰うのを待つより自分で買いに行った方が断然早い。

（コンビニまで自転車ですぐだし……よし。買いに行くか！）

――そうして、私はスマホと財布を鞄に突っ込んで家を出た。

＊＊＊

「どっちにしようかなー……」

コンビニに到着して、すぐにデザートコーナーに向かう。『大人気！』と書かれたポ

ップに目を惹かれ、シュークリームとエクレアを見比べる。どちらも似たようなものだけど、クリームかチョコ。大きな違いはこの点だ。

（どうしよう……！）

味で迷った時に決め手となるのは値段だ。値段に差があれば、安い方に決めるところなんだけど……ほぼ同額である場合は悩みに悩んでしまう。

「いっそのこと二つ……いや、でもそれは食べ過ぎだよね……」

そこまで値の張る商品ではないので、二つ買ってしまおうかとも考えた。けど、夜にデザート二つは……でも、どっちも捨てがたい。

（よし。次に入って来たお客さんの人数で決める！　奇数なら一つ、偶数なら二つ！）

そう心に決めて自動ドアの方に顔を向ける。タイミング良く、ウィイーン……と音を鳴らして男性二人が来店した。

「え……」

こんな偶然があるだろうか。

入って来た二人のうちの一人は、降谷さん。私の大好きな彼だった。

「降谷さん！」

驚きつつも意図せず出会えた喜びから、嬉しさを声に乗せて彼の名前を呼んだ。

ちょうど降谷さんも私に気付いたところだったらしく、目が合うと少し驚いたような顔をした。が、すぐに眉を寄せ、彼の眉間には皺が刻まれた。
（え、なんで……⁉　会いたくなかった感じですか⁉）
その表情に焦っていると、降谷さんは私の考えが読めたようだ。溜息を一つ吐き出し、「こんばんは」と挨拶をしながらこちらに歩いて来る。
その隣を歩く男性が、私と降谷さんを交互に見て口を開いた。
「なんだ？　降谷の知り合いか？」
そう尋ねた男性は人の良さそうな笑みを浮かべている。
降谷さんしか眼中に入っていなかった私は「こんばんは……！」と慌てて挨拶を返してから二人に頭を下げた。
男性は「おう！」と気楽な返事を返してくれた。けど、降谷さんは再び短い溜息が落とされ、「君はこんな時間に一人で……」と、お小言モードになっている。
「いやいや、まだ20時前ですよ？」
「犯罪の発生率は18時から上がるんだ。21時以降の方が更に高くなるが……」
「リアル情報怖いから止めてくださいよ！」
「リアルを知って自衛しないでどうする」

「確かに……」
「君は被害に遭いやすいタイプなんだから自衛しろと言っただろ」
降谷さんお得意の博識学とお説教が始まりそうな雰囲気を察知した私は、急いで鞄の取っ手に繋がっている紐を引っ張り、防犯ブザー付きのパスケースを見せる。
「だから、ほら！　ちゃんと持ってますよ！」
これは以前、私がストーカー被害に遭った時に、『今後また万が一同じようなことが起きたときのお守り』と、降谷さんから頂いたものだ。
ちなみに、ストーカーは降谷さんが一発ノックアウトで解決してくれた。
「あぁ、ちゃんと鞄に付けてくれているのか」
「当然です！」
ブザーを確認し、どこか嬉しそうな表情を見せる降谷さん。私も嬉しくなって口元が緩む。と、そこで私達のやり取りを見ていた男性は「ゴホン」と、わざとらしい咳払いをした。
「久々の再会のようなところを邪魔して悪いんだが……降谷、彼女の紹介をしてくれないのか？」
そして、ニヤニヤと楽しそうにしている。

「伊達班長……。自分が彼女持ちだからって……」
「ん？　俺は何か間違った反応をしているか？」
『伊達班長』と呼ばれた男性は変わらず楽し気であるのに対し、降谷さんは少し苦笑気味だ。
「……あぁ。紹介するよ」
私はというと、嬉しい誤解をしてくれているであろう伊達班長さんに、降谷さんがどう答えるのかが気になって脳内を忙しくさせていた。
そう言えば、私達の関係って言葉にすると何？　友達……？　いや、友達とは少し違う気がする。もし『ただの知人』と言われたら、間違いではないのだけれど、ショック過ぎる……！
「この子は――」
（さぁ、降谷さんは友人になんと紹介してくれるんですか!?）
伊達班長さんよりも私の方が返答に集中して聞いていた……そのとき。
――ダアン!!
大きな音に、降谷さんの声は掻き消された。
「ひゃあ!?」

私はあまりの衝撃音に、ビクッと肩を跳ねさせながら悲鳴を上げてしまった。
目の前にいた降谷さんと伊達班長さんも驚きを隠せていない表情で、入口の方に振り返っている。私からは二人の姿しか見えていないが、その背後に自動ドアが閉まっていくのが見えた。そして、天井に向けられたソレは……
（拳銃……いや、ライフル……!?）
ドラマや映画でしか見たことのない物騒な物。
今、何が起きているのかも理解が追い付かない。ただただ縋るような声で降谷さんの名前を呼ぼうとするも、突然の緊迫した状況に震える唇からは上手く声が出なかった。
「シッ……」
降谷さんはそのまま喋るなと言うかのように短く制し、私の腕を掴んで自分の方へと引き寄せた。何かから庇うように、体を降谷さんに密着させられ、がっしりと逞しい両腕に抱きしめられている。
普段ならばドキドキだし、嬉しい以外の何物でもないシチュエーションだ。
しかし、流石の私でもそんな浮ついた感情を持てる空気でないことは察せられる。というより、怖気しか感じられない。
そんな状況下で、次に聞こえてきたのは男の怒声だった。

「全員奥に移動しろ！」
その声に驚愕し、降谷さんの腕の中で体をビクつかせる。そこで漸く、コンビニ強盗だ……！　と、現状を理解した。
一気に現実を逸脱した恐怖に心を支配されていると、降谷さんの腕に力が込められた。そして、私の耳元で「落ち着け」と降谷さんが囁く。その声は、普段と変わらないトーンだった。
恐る恐る顔を上げれば、声色と同様に普段通り、自信に満ち溢れた表情をした降谷さんが目に映る。
伊達班長さんにも「大丈夫だ」と励まされ、頼もしい二人がそばにいてくれることで、ちょっぴり安心感を覚えた。が、それも束の間。
「そこ！　早く動け!!」
怒鳴られて思わず肩を竦めて顔を向けた先で、ニット帽の男とサングラス越しに目が合った。黒いサングラスに映る私は、降谷さんの腕の中で情けなく震え、今にも泣きだしそうな顔をしている。
ニット帽の男は、私の様子を見るや否やマスクを顎にずり下げ、ニヤリ……と、不気味に笑って見せると、ライフルの銃口を向けてきた。